

自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性に関する研究 領域「環境」及び領域「表現」の関連性を踏まえて

著者	中根 佳江, 瀧川 光治
雑誌名	大阪総合保育大学児童保育論集
号	2
ページ	59-74
発行年	2023-03-30
URL	http://doi.org/10.15043/00001064



〔論文〕

自然に触れる保育の中で育まれる 感覚や感性に関する研究

—領域「環境」及び領域「表現」の関連性を踏まえて—

中 根 佳 江
Yoshie Nakane

大阪総合保育大学
児童保育学部 非常勤講師

瀧 川 光 治
Koji Takigawa

大阪総合保育大学
児童保育学部

本研究では、「自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性」に着目して、自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性、そして表現への影響があるかを、5歳児と一緒にふれあいの森に園外保育を担当した保育者1人ずつ構造化インタビューを行い、インタビューを録画し、全て文字情報として逐語録を作成した。各質問の地区語録を、KHコーダーを用いて分析を行った。

その結果、子どもが自然体験をすることで、子どもは五感が刺激され、色々なことに気づき、感じて、イメージ力が高まるようになり、感覚や感性に影響することが分かった。また感性が高まることによって、気づいたことや感じたことを、伝えたいという気持ちが高まり、伝える語彙が増えることが分かった。また表情も豊かになり、見たものをリアルに表現しようとし、身体表現も豊かになるように、表現を意欲的になるように感じるぐらい、表現にも影響があると分かった。

園での自然に関わる保育を行うよりも、より自然豊かな森での保育を経験することによって、より感覚や感性に影響を与え、気づいたことなどを表現したいという気持ちも高まることが分かった。

五感を刺激されることに伴い、森全体の変化や、色などにも気づき、より感覚や表現が豊かになったことも分かった。

本研究を通して、保育の中に自然体験、自然との関わりの大切さが明確になった。

キーワード：自然体験、幼児、感覚、感性、表現

I. はじめに

幼稚園、保育所、こども園における保育の中で、五感を育むことの大切さは従前からよく言われていることである。幼児の感覚や感性を育むことについては、『保育所保育指針』等¹⁾では、とくに領域「環境」や領域「表現」の中に表1のように位置づけられている。表1の感覚や感性が言及されている箇所を見ると、感覚の働きを豊かにするために、「見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わう」といった経験を通して、「音、形、色、手触り、動き、味、香りなど」に気づいたり、感じたりすることが示されている。そのために、「遊びを通して感覚の発達を促される」ように工夫したり、「身近な自然や身の回りの事物に関わる中で、諸感覚を働かせる」ことを楽し

む機会を作る必要がある。また、感覚の働きを豊かにし、豊かな感性を育むためには、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにする」という「自然の中にある音、形、色など」に触れて、それらに気づくことが求められている。なお、この箇所は平成29年の3法令改訂で領域「表現」の内容の取扱いとして新たに付け加えられた箇所である。

このように、日々の保育を通して、幼児期に感覚や感性を育むことはとても大切なことであるが、様々なものに触れる中で、「音、形、色、手触り」に気づいたり、感じたりするだけでなく、「自然の中にある音、形、色など」に触れて、それらに気づくことから育まれる感覚や感性については、領域「環境」とも関連が深いものである。すなわち、その内容には「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さに気付く」、内容の取扱いには「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通

大阪総合保育大学
〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26
y.nakane0125@gmail.com

表1 領域「環境」及び領域「表現」の中の感覚や感性への言及（下線は引用者）

乳児保育に関わるねらい及び内容 「身近なものとの関わり感性が育つ」	ねらい「 <u>身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する</u> 」 内容「 <u>生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。</u> 」 内容の取扱い「 <u>玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、その時々の子どもの興味や関心を踏まえるなど、遊びを通して感覚の発達が促されるものとなるように工夫すること。</u> 」
1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容 領域「環境」 領域「表現」	ねらい「 <u>見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。</u> 」 内容「 <u>安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。</u> 」 内容の取扱い「 <u>玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、遊びを通して感覚の発達が促されるように工夫すること。</u> 」 ねらい「 <u>身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。</u> 」 内容「 <u>生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。</u> 」 内容の取扱い「 <u>身近な自然や身の回りの事物に関わる中で、発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせることを楽しむ遊びや素材を用意するなど保育の環境を整えること。</u> 」
3歳以上児の保育に関わるねらい及び内容 領域「環境」 領域「表現」	ねらい「 <u>身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</u> 」 ねらい「 <u>いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。</u> 」 内容「 <u>生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。</u> 」 内容の取扱い「 <u>豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。</u> 」

して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。」と示されている。前田（2020）は、「身近な様々な自然と乳児期から五感を通して関わることで、自然の素晴らしさや大きさなどの体験を通して感じ、生命の大切さを体験を通して学んでいくことが、家庭生活で自然に触れる機会が少なくなっている現代だからこそ、これからは必要になっていく」と述べている。²⁾

そこで本研究は、「自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性」に着目して、保育者のインタビュー調査を分析することによって、自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性、そして表現への影響を明らかにしたいと考えている。

そのため、本研究のインタビュー対象は多種多様な園や保育者を対象とするのではなく、筆者が自然体験活動の導入を行い、現在も自然体験を保育の中に取り入れ継続している認定こども園の保育者を対象とする。調査対象とする園では、園庭の自然に触れるだけでなく、年長児全員が園外の森（「ふれあいの森」と呼んでいる）に月1回行き、より自然豊かな環境において、自然体験活動を積極的に行っている。そこで、年長児たちは様々な自然に触れ、ふれあいの森の中の鳥や虫、風に揺れる木々の音に気づいたり、様々な季節の中の森の色合いや

においの変化などにも気づいたり、森の中で様々な形に出会っている。それゆえ、まさに平成29年改訂で領域「表現」に新たに付け加えられた箇所に該当する取り組みを行っている園である。それによって得られる知見は限定的ではあるものの、特色のある1園の取り組みから有益な知見が得られると考えられる。

自然の中で、何を感じて、どのように表現しているのかを、そして自然体験を通じて、子どもの感性にどのように影響をしているか、また子どもの表現にもどのように影響しているか明らかにすることによって、保育の中に自然体験、自然との関わりの大切さが明確になると考え、今回の研究のテーマとした。

II. 方法

1. 分析の対象：大阪府内の認定こども園A園（以下A園とする）に勤務する保育者のうち、5歳児と一緒にふれあいの森に園外保育を担当した保育者の9名を対象とする。
2. 調査時期：2022年10月4日～5日 1人15分程度
3. 調査方法・分析方法
 - (1) オンライン（ZOOM）にて、1人ずつ構造化インタビューを行う。
 - 質問事項（7項目）を用紙1枚にまとめて事

前配布し、その質問事項を確認しながらインタビューを行う。

(2) インタビューを録画し、質問7項目の全て文字情報として逐語録を作成した。

(3) 質問1から5の逐語録のみ計量テキスト分析ソフトであるKHコーダーを用いて分析を行う。

本研究で使用するKHコーダーは、文章データテキストデータ分析用のフリーソフトで樋口によって開発され、近年ではアンケート調査の自由記述の分析などにも多用されている。テキストマイニング、計量テキスト分析と呼ばれる方法である。

4. 倫理的配慮

本研究を行うに当たり、A園に研究についての説明書を配布し、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることは無いことを説明した。その後、A園より同意書を受領し、インタビューを依頼した保育者にも、同様に説明書を配布後、同意書を受領した。同意書を持って、同意したこととした。

5. インタビュー内容

インタビュー内容としては、「自然の中にある音、形、色、手触り、動き、味、香りなど」のうち、質問1から質問4で「音」「形」「香り(匂い)」「手触り(感触)」について感じたり、気づいたりしたことやその表現について取り上げ、質問5としては「それ以外」についての感性や表現を取り上げた。さらに、質問6及び7で、A園で園庭やふれあいの森で自然に関わる経験と感性と表現との関連性について取り上げた。

質問1 ふれあいの森の中で、子どもが「音」に関して、何か感じたり、気づいたことはありましたか。また、感じたり、気づいたことを、言葉や身振りなどで表現していたことはありましたか。

質問2 ふれあいの森の中で、子どもが「形」に関して、何か感じたり、気づいたことはありましたか。また、感じたり、気づいたことを、言葉や身振りなどで表現していたことはありましたか。

質問3 ふれあいの森の中で、子どもが「匂い」に関して、何か感じたり、気づいたことはありましたか。また、感じたり、気づいたことを、言葉や身振りなどで表現していたことはありましたか。

質問4 ふれあいの森の中で、子どもが「感触」に関

して、何か感じたり、気づいたことはありましたか。また、感じたり、気づいたことを、言葉や身振りなどで表現していたことはありましたか。

質問5 ふれあいの森の中で、子どもが「音・形・匂い・感触」以外で、何か感じたり、気づいたことはありましたか。また、感じたり、気づいたことを、言葉や身振りなどで表現していたことはありましたか。

質問6 ふれあいの森や園庭での自然に関わる経験が、子どもの感性にどのような影響を与えていると思いますか。与えていると思われるのであれば、その理由も教えてください。

質問7 ふれあいの森や園庭での自然に関わる経験が、子どもの表現にどのような影響を与えていると思いますか。与えていると思われるのであれば、その理由も教えてください。

6. KHコーダーによる分析方法について(質問1～5)

(1) 共起ネットワーク図の作成について

出現回数3以上、共起関係(数)の描画数60の設定で描き出されたネットワーク図を作成した。

(2) 共起ネットワークから見出されたカテゴリー内の抽出語について

このカテゴリー内の抽出後について、KWICコンコードダンスのコマンドを用いて、対象の抽出語を含むテキストデータの一覧を得た。

(3) 抽出語が使用されている文脈について

カテゴリー内の他の抽出語とどのような文脈で使用されているか、あるいは他のカテゴリー抽出されたごとの関係や傾向を探ることで、そのカテゴリーで述べられていたことを数点まとめた。

Ⅲ. 分析結果

以下に、質問1～5についてはKHコーダーによる分析結果を示し、質問6及び7については、どのような回答があったかの結果を示す。

1. 質問1「音に関する感性と表現」について

質問1は、ふれあいの森での自然に触れる保育の中で、子どもの「音」に関しての感性と表現についての実際の様子についての質問である。森での「音」は子どもだけでなく、保育者も同じ音を聞いているので、自分が聞こえている際、子どもの様子を見ているので、気づく

ことも多かったようである。

そこで、質問1についての9人の保育者のテキストデータから、総抽出語数1222、異なり語数215が得られた。表2は抽出リストコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語とかく出現回数をまとめた物である。

分析方法(1)(2)により、図1のように共起ネットワーク内に5つのカテゴリー「葉っぱと耳と友達」「風と木と気づく」「鳥と鳴き声と聞くと言う」「鳴ると雨と表現」「虫と聞こえると言葉」が現れた。

(1) 何の音(どのような音)に子どもたちは気づいているか

抽出後や共起ネットワークに見られるように「鳥や虫の鳴き声」「風で木が揺れる音」「葉っぱや落ち葉のなる音」「雨の音」に気づいていることがわかる。

(2) 葉っぱ

「葉っぱ」を中心に「耳」「カサカサ」「友達」などで構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 葉っぱ

「葉っぱが風に揺れている音を聞き、カサカサ鳴っている」「葉っぱがカサカサするねと言う」「春でも枯れた葉っぱがあり、棒でつついてカサカサ言っていると言

ながら楽しんでいた」という発言があった。葉っぱが風で揺れる音や、枯れた葉っぱを触って鳴る音に気づき、擬音語で表現していることが分かる。

② 耳を澄ます

「耳を澄まして聞く」「耳に手を当て、音を集めようとし、音を楽しんでいた」という発言があった。音を集めようとし、手を使いながら聞く姿を見て、さまざまな音を

表2 質問1「音に関する感性と表現」の抽出語

出現回数	抽出語
49	音
28	鳴き声
26	言う
24	聞く
17	鳥
11	気づく・風
9	落ち葉
8	聞こえる・鳴る
7	違う・感じる・耳・木・友達
6	楽しむ・鳴く
5	虫・揺れる
4	カサカサ・強い・興味・言葉・示す・手・澄ます・踏む・表現・歩く・名前・目
3	違い・雨・枝・大きい・聴く・方向・葉っぱ

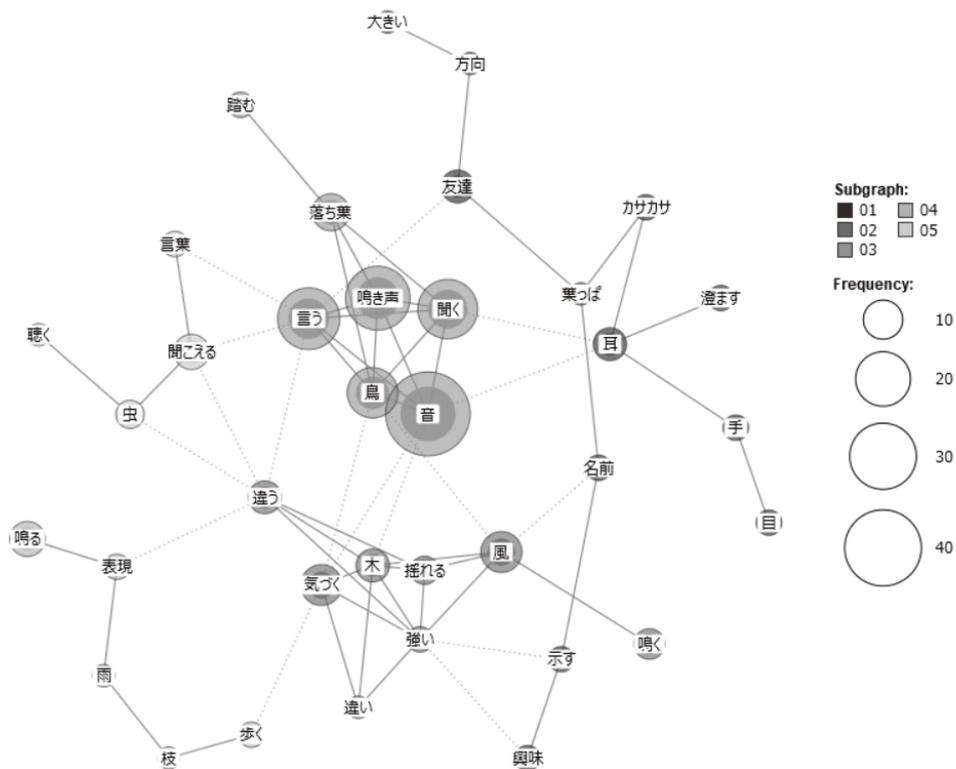


図1 質問1「音に対する感性と表現」の共起ネットワーク

しっかり聞こうとする子どもの様子が分かった。

③ 友達

「落ち葉の音を踏んで友達が誘って音を出す」という発言があった。落ち葉になった葉っぱを踏むことによって音がなることに気づき、友達と一緒に音を楽しんでいたことが分かった。

(3) 風と木

「風」を中心に「木」「気づく」「揺れる」などで構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「風の強い日に木が揺れる音を聞いてすごいな～と言う」「風の強い日は木が揺れる音をゴォーとなっているという風に表現する」「風の強い日、木の揺れる音が園とは、木の数や大きさが違うので音の違いに気づく」という発言があった。風によって木が揺れる音に気づき、擬音語で表現したり、気持ちを言葉で伝えていたことが分かる。また、園と木の音との違いに気づき、数や大きさが違いを表現することが分かった。

(4) 鳥の鳴き声

「鳥の鳴き声」を中心に「聞く」「言う」「落ち葉」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 鳴き声を聞く

「鳥の鳴き声を、耳を澄まして聞く」「鳥の鳴き声が聞こえたら、みんな聞こえるように静かにしないと聞けないよと言う」「鳥の鳴き声を聞いて、聞いたことがあるかないか良く聞こうとする様子があった」「鳥の鳴き声をこういう風にして鳴いているのかな?と鳴き声を真似する」という発言があった。また、「鳥だけではなく虫の声を聞く」という発言もある。音は保育者も同じ音を自然に聞こえてくることから、子どもが聞いている様子を感じやすいと分かる。そして、聞こえてくる音を、耳を澄まして聞く様子や、友達に静かにすることを促したり、鳥の鳴き声の真似をする表現が見られることが分かった。また、鳥の鳴き声以外にも、虫や蛙の鳴き声に気づき、擬音語で表現している様子が分かった。

② 鳴き声に気づく

①では聞くことではあったが、「鳴き声に気づく」「色々な季節の鳥の鳴き声に気づいて鳴き声が違うと言う」「蝉の鳴き声大きいので近くで鳴いていると言う」という発言がある。ただ聞く様子だけでなく、違いに気づいたことを言葉で表現することが分かった。

③ 鳴き声に興味を示す

①は聞いたことを表現し、②の鳴き声に気づきを言葉で伝えるだけでなく、「街の鳥の同じような鳴き声に興味を持って聞いていた」「いつもと違う鳴き声を聞いて、

興味を示して名前を友達や保育者に言う」という発言がある。色々な鳥の鳴き声を聞いて、違いを感じたり、いつも聞いている鳴き声と同じと感じたりして、興味を示し友達や保育者に伝えることが分かった。鳥の鳴き声以外にも、「今まで聞いた経験のないカエルの鳴き声に興味を示し、クワクワみたいな音が鳴ると言う」という発言もあった。音の違いに興味を持ち、擬音語で表現していることが分かる。

(5) 鳴る

「鳴る」を中心に「雨」「枝」などで構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 雨

「雨の日はカッパを着て歩くと、雨の当たる音がポツポツという音が鳴る」という発言があった。雨粒がカッパにあたる音を、感じて擬音語で表現することが分かった。

② 枝

「木の枝を折る音に気づいて楽しむ」「木の枝を折るとポキッと音がするけど、太めの枝はいい音がしない。何かしなっという音がすると言う」という発言があった。枝が折れる音に気づき、折れる音を擬音語で表現することが分かる。そして、枝の太さの違いで、折れる音の違いにも気づき、言葉で折れる音を表現することが分かった。

(6) 聞く

「聞こえる」を中心に「虫」「言葉」「聴く」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 虫

「大人が聞こえない音を聞こえたと言い、聞こえてくる音を、虫が飛んだとか音だけで想像して言う」「季節によって鳥や虫の鳴き声が違うことに気づき、違う鳴き声がするとか、前は聞こえなかった虫の音がすると言う」という発言があった。虫の音を想像や、イメージの中で聴いたり、いつも聞いたことのない音を虫だと想像して、音を聴いている様子が分かった。また、季節によって違う虫の声にも気づき、そのことを言葉にしては伝えながら聴いている様子が分かった。

② 言葉

「蝉の鳴き声を真似して、聞こえたように言葉で友達と言ひあう」「鳴き声を聞き漏らした友達に、こういう風に鳴っていたよと言葉で伝え合う」「森を歩くだけで、音が鳴ることに気づき、音を言葉で表現する」という発言がある。虫や森の音を言葉で友達に伝え合い表現している様子が分かった。

③ 聴く

「聞いたことのない音を聴いて虫なのかどうか？と言いながら音をしっかり聞こうとしている」という発言があった。自然に耳に入ってきて聞こえる音を、何か？と言葉で表現し、意識して音を聴こうとしていることが分かった。

2. 質問2「形に関する感性と表現」について

質問2は、ふれあいの森での自然に触れる保育の中で、子どもの「形」に関しての感性と表現についての実際の様子についての質問である。森で色々なものを見て、気づいたことを言葉や身体で表現している様子を保育者が気づいたことを述べていた。

そこで、質問2についての9人の保育者のテキストデータから、総抽出語数1114、異なり語数212が得られた。表3は抽出リストコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語とかく出現回数をまとめた物である。

分析方法(1)(2)により、図2のように共起ネットワーク内に5つのカテゴリー「葉っぱと見つけると大きいとドングリ」「友達と伝えると言う」「森と自然」「穴と開くと合わせると食べる」「園と比べると楽しむ」が現れた。

(1) 何の形(どのような形)に子どもたちは気づいているか

抽出後や共起ネットワークに見られるように「葉っぱやドングリの形」「虫の大きさ」「葉っぱやドングリの穴」「雲の形」に気づいていることがわかる。

(2) 葉っぱやドングリの形

「葉っぱの形」を中心に「見つける」「大きい」「ドングリ」などで構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである

表3 質問2「形に関する感性と表現」の抽出語

出現回数	出現回数
30	形・葉っぱ
13	見る
12	ドングリ・言う・大きい・友達
10	見つける
8	違い・穴・伝える
7	子ども
6	違う・虫・鳥
5	雲・楽しむ・表現
4	イメージ・園・開く・手・食べる・比べる・物
3	感じる・顔・気づく・見える・合わせる・姿・自然・森・先生・知る・入れる・比較・変化・話す

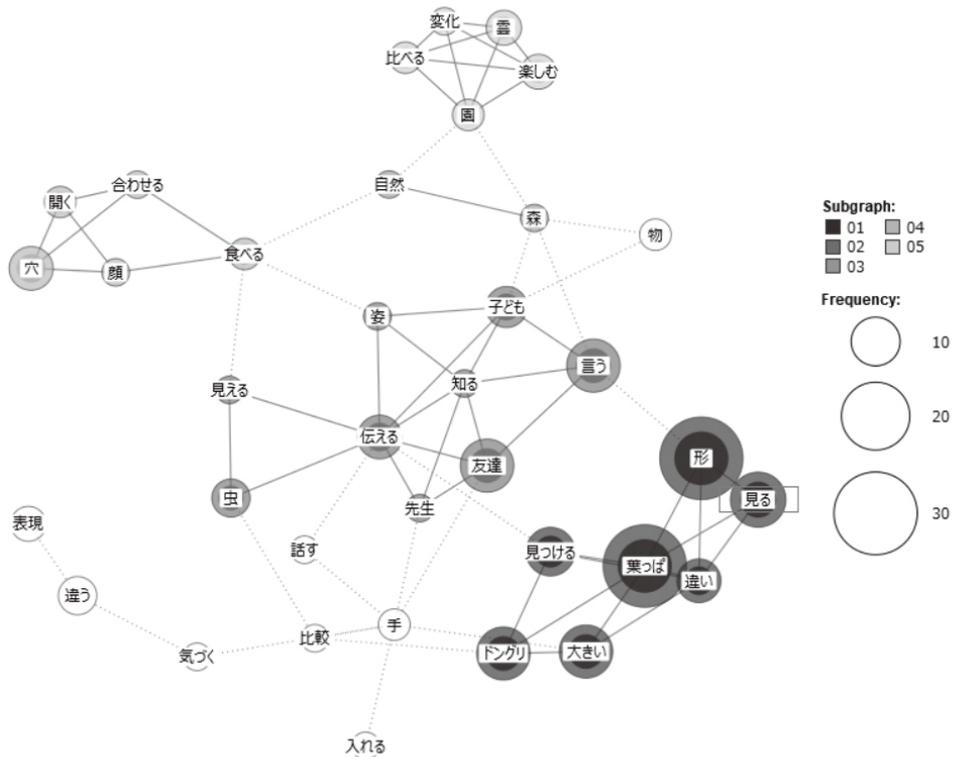


図2 質問2「形に対する感性と表現」の共起ネットワーク

る。

① 葉っぱの形

「葉っぱの形の違いを感じて同じ葉っぱを探す」「大きな葉っぱを見つけて自分の手と比較する」「大きな葉っぱを見たり、今まで見たことのないような形の葉っぱを見つめる」「園にある葉っぱと形が同じか比べてる」などという発言があった。葉っぱの形や、葉っぱの大きい小さい、見たことのない形など、形に気づいていることが分かる。そして、気づいた形の葉っぱを探し、友達と話す様子から、言葉で表現したり、手と比較するなどの身体的な表現を楽しむことが分かった。

② ドングリ

「ドングリの大きさを比較して、これはこんな形、小さい、細長いということを友達と話す」「ドングリの大きさや形によって、太っているドングリのように言葉で友達と話す」「ドングリで表面のピカピカで大きなドングリを青ドングリと呼んでいた」「ドングリも同じような形のものもあるけど、模様が違うとか線が入っているとか言っている姿がある」「ドングリの形の違いで、へこんでいたら何でかなと言う」という発言があった。ドングリも大小などの形の違いや、表面の様子に気づき、形を名付けて言葉で表現したり、友達と話し合ったり、へこんでいる様子を考えている様子を言葉で表現することが分かった。

(3) 友達に伝える

「友達に伝える」を中心に「言う」「虫」「子ども」「先生」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 友達や先生に伝える

(2)にあるように、「葉っぱの形や大きさ」や「ドングリの形や表面の様子」に気づき、友達や先生に伝える発言があった。気づきを自分だけで表現するのではなく、友達や先生に伝えることで、表現を楽しんでいる様子が分かった。

② 虫

「虫の大きさに驚いたと言う」「葉っぱの穴は、だんご虫に食べられたと言う」などの発言があった。虫自体の形の大きさに気づき、話したり、葉っぱの穴はだんご虫が食べたことに気づき、先生に伝えることで、穴について考えたことを先生に共有することが分かった。

(4) 森と自然

「森」と「自然」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「園にある自然の物と森にある自然物の大きさや形の違いを友達と比べていた」「5歳児までの園庭での自然

体験から得た知識を森で体験したときに思い出して、伝え合う姿がある」という発言があった。園で体験して得た知識と森で体験したことの違いに気づきを、友達と一緒に比較したり、伝え合うという表現をしていることが分かった。

(5) 穴

「穴」を中心に、「開く」「合わせる」「顔」「食べる」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 「穴が開く」

「穴の開いた葉っぱを見つけて伝える」「穴の開いた葉っぱを見てイメージする」「葉っぱを見てお面だと顔に合わせて友達や先生に見せる」という発言があった。葉っぱの外枠の形以外に、葉っぱの中の穴に気づき、穴が開いていることを伝えたり、また、穴が開いている葉っぱを見て、何かに見立てるようなイメージをして、友達や先生に伝えて表現を楽しんでいる様子が分かった。

② 合わせる

「色々な形をしている石を見つけて、2つ合わせて動物に見えるねとか言う」という発言があった。単体の自然物の形の気づきではなく、2つの物を合わせることによって、動物などに見立てるイメージ力を発揮し、想像した物を友達や先生に伝えている様子が分かった。

③ 食べる

①で穴が開いた葉っぱを見つけていたが、その穴が「だんご虫に食べられた穴だと言う」「始めは虫に食べられたと言っていたが、調べてだんご虫が食べたと知ったあとは、だんご虫が食べたんだと言う」「そのことを園庭で低年齢の子どもたちに伝える」という発言があった。穴に気づいたあと、虫が食べたのかな?と思ったことを、調べて、その後はだんご虫が食べたと言ったり、園において、低年齢児に伝えるまでに至ったことが分かった。

(6) 雲を楽しむ

「雲」を中心に、「変化」「園」「楽しむ」「比べる」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「森の一番上のところで、雲の形や雲の形の変化をよく見て、形や変化を楽しみながら見ていた」「雲の形をよく見て、雲が走っているとか言いながら、雲の形や変化を楽しんでいた」という発言があった。高い場所で、遮る物がない場所で、雲の形や雲の変化を感じ楽しんでいる様子が分かった。また雲の変化を言葉で表現している様子も分かった。園との違いを感じながら、森で色々な気づきがあることが分かる。また園ではない「モグ

ラの穴の大きさや盛り上がりなどを比べていた」という発言もあった。雲だけでなく、園では体験できないモグラの穴の形も大きさや高さを比べて、違いに気づき、楽しんでいる様子が分かった。

3. 質問3「匂いに関する感性と表現」について

質問3は、ふれあいの森での自然に触れる保育の中で、子どもの「形」に関しての感性と表現についての実際の様子についての質問である。質問1、2の「音」「形」より、保育者が、子どもがどのように気づいて感じているかが難しかったと言う人もいた。五感の中で、具体的に感じる事が出来ないのかもしれない。その中でも、自然に匂うものや、自然の中で活動することによって、匂いに気づく子どもの様子に気づいた保育者もいた。

その中で、森で色々なものを匂い、気づいたことを言葉や身体で表現している様子を保育者が気づいたことを述べていた。

そこで、質問3についての9人の保育者のテキストデータから、総抽出語数843、異なり語数163が得られた。表4は抽出リストコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語とかく出現回数をまとめた物である。

分析方法(1)(2)により、図3のように共起ネットワーク内に4つのカテゴリー「冷たいと空気」「葉っぱと甘いと言う」「ハーブと良いと友達と表現」「動物と場所と全体と違う」が現れた。

(1) 何の匂い(どのような匂い)に子どもたちは気づいているか

抽出後や共起ネットワークに見られるように「葉っぱ」「雨の時の森」「空気の冷たさ」「動物のウンチ」「森全体」といった匂いに気づいていることがわかる。

表4 質問3「匂いに関する感性と表現」の抽出語

出現回数	出現回数
60	匂い
23	言う
11	葉っぱ
9	違う・感じる
8	森
7	お茶・甘い・気づく
6	匂う
5	ウンチ・違い・雨
4	動物・友達・冷たい
3	ハーブ・空気・姿・臭い・場所・全体・表現・良い

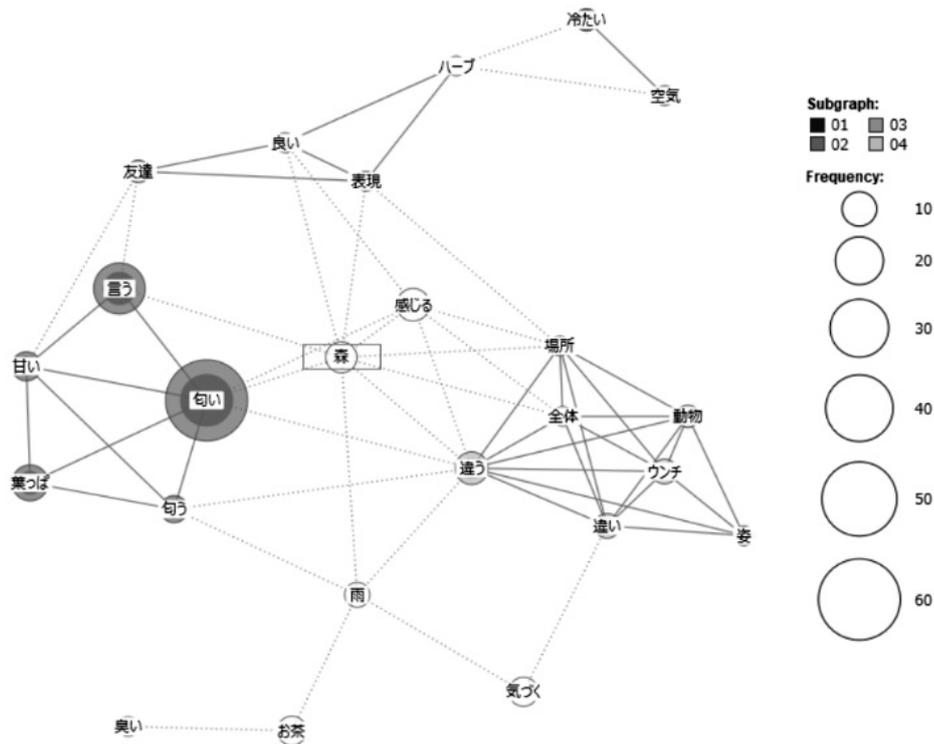


図3 質問3「匂いに対する感性と表現」の共起ネットワーク

(2) 冷たい空気

「冷たい」と「空気」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「冬の冷たい空気を冷たい匂いがすると言う」「空気がヒヤッとする匂いを感じる」「空気が冷たい痛いというような表現をしていた」という発言があった。冷たさを感じ、冷たい空気を嗅いだことによって、匂いとして表現したことが分かった。

(3) 葉っぱの匂い

「匂い」を中心に、「葉っぱ」「甘い」「言う」で構成されていた。

「葉っぱで甘くていい匂いがする物を見つける姿があった」「お茶作りの時に、葉っぱの匂いを嗅いで、匂いの変化を感じていた」「甘いにおいがする葉っぱを匂って、蜂蜜みたいな匂いとか、パンにかけて食べたことがあるのと一緒だと言う」「いい匂いの葉っぱを、甘い匂いのする葉っぱとか、キャラメルっぽい匂いがすると言う」「甘い匂いのする葉っぱとそうでは無い葉っぱを友達と分けていた」という発言があった。葉っぱのいい匂いに気づいたり、葉っぱの匂いの変化に気づいていたことが分かった。また、いい匂いの葉っぱを、甘い匂い・蜂蜜みたいな匂いなどと感じたことを言葉にして、また何かに見立てて匂いを表現していることが分かった。

(4) 友達と表現

「友達」を中心に「良い」「表現」「ハーブ」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 友達と表現

「お茶作りの工程で、匂いをかいで、友達同士臭いな～とか、いい匂いになってきたと言っていた」「友達にこの辺りに甘い匂いの葉っぱがあるよと伝えていた」「甘い匂いの葉っぱとそうで無い葉っぱを友達と分けていた」という発言があった。匂いの変化や違いに気づき、友達同士で匂って話をしたり、匂いの違いで葉っぱを分けたりする表現がみられることが分かった。

② ハーブの匂い

「森に行き、葉っぱを匂って、ハーブではないけどハーブの匂いがすると言っていた」という発言があった。園でハーブを栽培していたことがあり、子どもがハーブの匂いを知っていたので、葉っぱの匂いをハーブの匂いと同じに感じ、ハーブの匂いがするという表現があったことが分かった。

(5) 違う

「違う」を中心に「場所」「全体」「ウンチ」「動物」で

構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 場所や全体の違う匂い

「森全体の匂いを季節よっての違いや、場所よっての匂いの違いを感じて、前に来たときの匂いと違うとか、陽の当たりがわるい場所などは、何かここは匂いが違うなど話をしている姿があった」「毎回の森の匂いの違いを感じていた。あと場所によっても違う匂いがするなど、森全体の匂いを感じている」などの発言があった。子どもが森全体の匂いを自然に匂い、その匂いを覚えていて、毎回森の匂いを感じるによって違いに気づくことが分かり、また気づいたことを言葉で伝えていることが分かった。森全体だけでなく、森の中でも場所によって匂いが違うことに気づき、気づいたことを言葉で表現していることが分かった。

② 動物のウンチの匂い

「動物のウンチをみて匂う姿がある」「動物のウンチの匂いを嗅いで色々感じていた」「動物のウンチをみて匂ってみて、匂いがしないと、臭～ということ伝え合う」「動物のウンチを見つけて、顔を近づけて匂いを嗅いでいて、ウンチの匂いはしないけど、土の匂いがするなという表現もしていた」という発言があった。動物のウンチを見つけて、見るだけでなく匂いに興味があり、嗅いで匂いの違いに気づき、その匂いを言葉で表現をし、知っている匂いに例えて表現することが分かった。

4. 質問4「感触に関する感性と表現」について

質問4は、ふれあいの森での自然に触れる保育の中で、子どもの「感触」に関しての感性と表現についての実際の様子についての質問である。保育者が感触を一緒に感じ、感じているところを目にすることによって、発言が多かった。同じ体験をして、子どもも保育者も感触は同じ感覚で感じる事が出来るからではないかと推察する。

その中で、森で色々なものを感じ、気づいたことを言葉や身体で表現している様子を保育者が気づいたことを述べていた。

そこで、質問4についての9人の保育者のテキストデータから、総抽出語数901、異なり語数164が得られた。表5は抽出リストコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語とかく出現回数をまとめた物である。

分析方法(1)(2)により、図4のように共起ネットワーク内に6つのカテゴリー「土と森」「葉っぱと触ると感じる」「指と雨と足」「歩くと伝える」「言う」と友

達と落ち葉と楽しむ」「昆虫と樹液とゼリーとつつじ」が現れた。

(1) 何の感触（どのような感触）に子どもたちは気づいているか

抽出後や共起ネットワークに見られるように「葉っぱを触ったときの感触」「落ち葉を踏んだときの感触」「土を踏んだ時の感触」「樹液の感触」に気づいていることがわかる。

(2) 森の土

「森」と「土」で構成された。分析方法（3）により

表5 質問4「感触に関する感性と表現」の抽出語

出現回数	出現回数
25	葉っぱ
21	触る
15	言う
14	感じる
13	ベタベタ・感触
6	楽しむ・感じ・気づく・思う・踏む・友達
5	違う・指
4	ゼリー・昆虫・樹液・落ち葉
3	つつじ・ツルツル・違い・雨・森・足・伝える・土・歩く・裏

抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「森の土を踏むと、普段のコンクリートとは違う感触を感じる」「土の感触を足で踏んで、足の裏から感じていた」「森を歩いたとき、土や木くずがあるので、フワフワしていると感じたと言う」という発言があった。普段歩いているコンクリートの地面と、土の地面との違いを足の裏で感じ、その違いを擬音語で表現していることが分かった。

(3) 葉っぱの感触

「葉っぱ」を中心に「触る」「感じる」「違い」で構成されていた。分析方法（3）により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「葉っぱを触って、つるつるやざらざらと感じる」「指先で触ってベタベタとかふわふわな葉っぱがあることに気づく」「つるつるの葉っぱと思って触ったら、ふわふわだったり、ざらざらすると思ったら、つるつるしたり、厚みがあったり、固かったりしたときなど驚いていた」「葉っぱを触って、つるつるや毛が生えているとか、先生や友達に言う」「葉っぱを触って同じ感触の葉っぱを探したり、色々なところにあることを伝えたり、探しながら、ベタベタしている葉っぱがさっきもあつた葉っぱだと言う」などの発言があった。葉っぱを触って、感

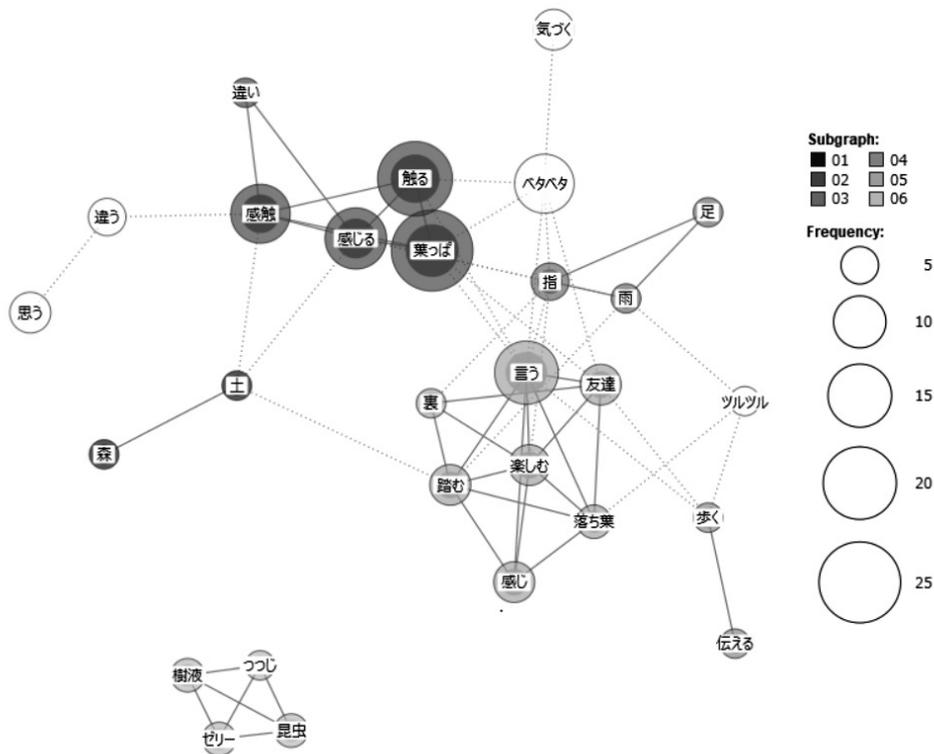


図4 質問4「感触に対する感性と表現」の共起ネットワーク

触の違いに気づいたり、思っている感触と違いを感じたり、葉っぱの感触を擬音語などで友達や先生に伝えたり、同じ感触の葉っぱをさまざまなおところであることが分かった様子であった。

(4) 雨

「指」を中心に「足」「雨」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 雨の日の足の指

「冬の雨の寒い日、足の指が痛いと感じたことを言う」という発言があった。寒さを感じ、冷なくなった足の指を痛いという言葉で表現することが分かった。

② 雨の感触

「雨がカッパにあたる感触を肌で感じ、音と共に、雨粒の感じを楽しみながら友達と歩く」という発言があった。雨粒を肌で感じ、友達と楽しく歩く様子から、雨の感触を楽しんでいる様子が分かった。

(5) 伝える

「伝える」と「歩く」で構成されていた。

「歩いていて、葉っぱをちょっと触って、この葉っぱはこんな。とか言葉で伝えたり、さっきあった葉っぱ。だと友達に言う」「森を歩いたとき、土や木くずがあるので、ふわふわしていると感じたことも言う」という発言がある。その他の発言例は(4)②で示したことと同じなので省略する。

(6) 落ち葉の感触

「言う」を中心に「落ち葉」「踏む」「楽しむ」「感じ」「友達」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

「落ち葉を触って、チクチクする」「落ち葉を触って、グチャグチャすると言う」「沢山の落ち葉をほり投げて、シャワーと言う」「落ち葉いっぱいのおところを踏んで、フワフワしていると言う」「枯れ葉の上を飛んだりして、ふかふかなことを友達と楽しんでた」という発言があった。落ち葉の感触を、触ったり踏んだりほり投げたりして、友達と身体で感じ、言葉で気持ちを伝えたり、身体で表現していることが分かった。

(7) 樹液などの感触

「樹液」「ゼリー」「昆虫」「つつじ」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 樹液

「クワガタなどの昆虫ゼリーを園で触っているので、見た目は同じようだが、感触は樹液が違うと感じる」「昆虫ゼリーはベタベタしていないのに、樹液はベタベタすることに気づく」という発言があった。見た目と

触った違いを感じ、その感触を言葉で表現していたことが分かった。

② つつじの感触

「もちつつじの葉っぱはベタベタするに気づく」「もちつつじの葉っぱがベタベタすると言いながら、みんなでもちつつじの葉っぱをたくさん触っていた」という発言があった。葉っぱがベタベタすることに気づき、そのことを友達と言いながらたくさん触って楽しんでいる様子が分かった。

5. 質問5「多様な感性と表現」について

質問5は、ふれあいの森での自然に触れる保育の中で、子どもの「多様な感性と表現」についての実際の様子についての質問である。キーワードが定まっていないと、回答に悩む保育者もいた。そして、数回しか森に行っていない保育者は色々な季節に行っていない。また、同じような季節で数回だけ行った保育者は、季節の変化などを子どもが感じたことや気づいたことが分からないと考える。しかし、さまざまな季節に子どもと森に行った保育者は、色や季節などに関する子どもの様子を知ることが出来た。

その中で、森で多様な物への気づいたことを言葉や身体で表現している様子を保育者が気づいたことを述べていた。

そこで、質問5についての9人の保育者のテキストデータから、総抽出語数1139、異なり語数223が得られた。表6は抽出リストコマンドで得られた結果から、出現回数3以上の抽出語とかく出現回数をまとめたものである。

表6 質問5「多様な感性と表現」の抽出語

出現回数	出現回数
22	言う
17	色・葉っぱ
14	木
12	違う・季節
11	感じる
9	冬
8	気づく・虫
7	違い・森
6	見る・変わる
5	川・大きい・落ちる・落ち葉
4	色々・森・緑
3	きれい・イメージ・ドングリ・感じ・言葉・光る・行く・高い・春・数・名前・様子・話す

分析方法(1)(2)により、図5のように共起ネッ

トワーク内に4つのカテゴリ「色と季節と森と感じる」「冬と虫」「川とイメージと緑と落ちる」「色々」と森」が現れた。

(1) 何に(どのようなものに)子どもたちは気づいているか

抽出後や共起ネットワークに見られるように「色」「季節の変化」「冬の虫」「イメージとの違い」に気づいていることがわかる。

(2) 季節の違い

「色」を中心に「季節」「森」「違う」「感じる」で構成された。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 季節の色

「季節により森の色が変わっていると気づいていた」「季節によって、ドングリの色が違うと話していた」「季節が変わるごとに、「森の色が変わっていると、バスを降りて直ぐの場所を見て、子どもたちが言っていた」「季節によって、ドングリの色が違う」「カマキリが季節によって色や大きさ、見つけられる数が違うと気づいている。冬だからかな?と考えている」などという発言があった。季節により、森全体の色や、個々の色の違いに気づき、考えて、言葉で表現していることが分かった。

② 季節によって違う

「季節によって森の木の様子が違うことを感じていた」「季節によって、木についている葉っぱの数が違うことに気づく」「季節によって、虫のサイズが違うということを友達と話す」「季節が変わってくると、葉っぱが変わって、べたべたしなくなったと言っていた」「春と冬では葉っぱが違うということに気がついていて、春は良い感じに葉っぱついている。夏はすごい緑。冬になるとはだかん坊の木というような表現をする。冬になって葉っぱが落ちると、この木は落ちているのにあの木は落ちていないという木の違いを話していた」「虫も冬にいないのはどうしたんだろう?冬眠したのかな?と話していた」などの発言があった。季節によって、木や虫や葉っぱが変化の様子に気づき、思ったことや考えたことを、言葉で表現していることが分かった。

(3) 冬の虫

「冬の虫」を中心に「春」「大きい」「話す」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については、(2)で示したことと同じなので省略する。

(4) 川とドングリと緑

「川」と「イメージ」「ドングリ」と「光る」「緑」と「落ちる」で構成されていた。分析方法(3)により抽出

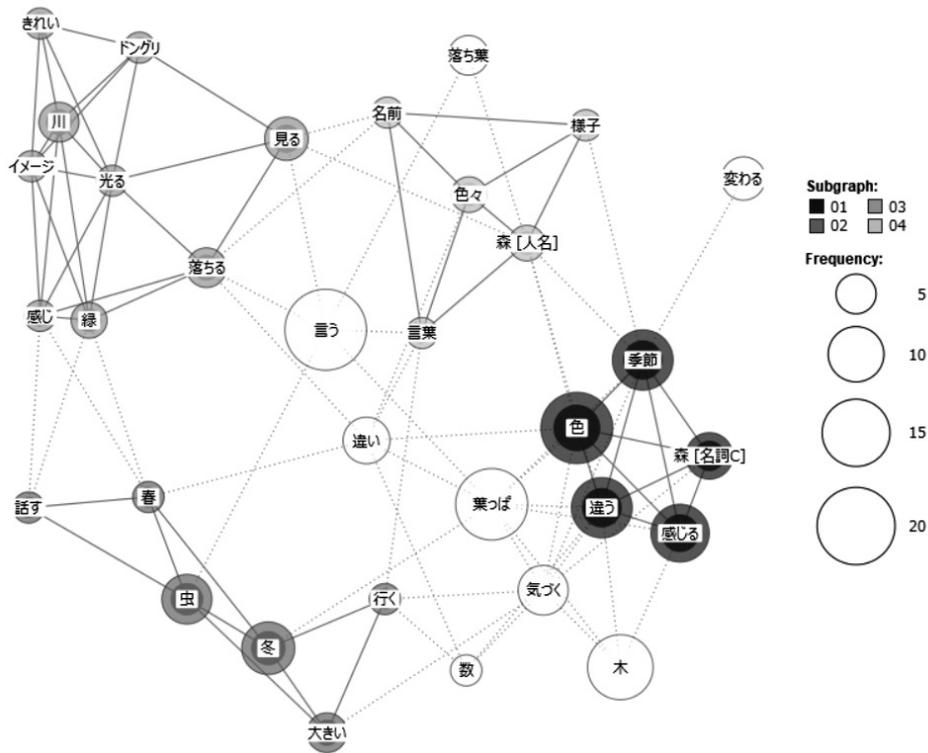


図5 質問5「多様な感性と表現」の共起ネットワーク

出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 川のイメージ

「川の色が自分のイメージと違ったので、不思議に感じていた」「6月に川が緑になっていて、子どものイメージでは川はきれいな透明な感じだったので、なんで緑やろう?とか言っていて、近くに苔がいっぱいついていたので、これが落ちたのかな?とか想像していた」「緑は汚いというイメージがあるらしく、川が汚くなっているのではと話をしていたり、川を不思議そうな感じで見ていた」という発言があった。子どものイメージと実際見た色が違うことに気づき、なぜだろうということを感じ、その思いを言葉にしたり、周りを見て考えたことを友達と言葉で表現し合っていることが分かった。

② ドングリの色・光沢

「ドングリの輝きを感じてきれいと思っていた」「ドングリを拾って帰り、こすると光ることを教えてもらったので、園ですごくこすって、光ることを確かめていて、光ったことに感動していた」という発言があった。ドングリを見て、感じたことや、光ることを知り、実際こすることによって、光を感じて、感動する様子が分かった。

③ 葉っぱの緑と落ちる

「春は良い感じに葉っぱついている。夏はすっごい緑。冬になるとはだかん坊の木というような表現をする。冬になって葉っぱが落ちると、この木は落ちているのにあの木は落ちていないという木の違いを話していた」「真冬には葉っぱが落ちて、スカスカの森というような言葉で言ったりした」などという発言があった。その他の発言例は(2)①②で示したことと同じなので、省略する。

(5) 森の様子

「森」「色々」「言葉」「様子」「名前」で構成されていた。分析方法(3)により抽出語が使用されている文脈については下記の通りである。

① 森の色々な様子

「森の中で色々な色に気づいていた」「季節によって、森の様子の違いを感じて、真冬には葉っぱが落ちて、「スカスカの森」というような言葉で言ったりした。スカスカの森だから、鳥や色々な物を見つけていた」「毎月行くと、森の違いを良く覚えていて、前に来たときと違うということを色々なことに気づいて言葉で言っていた」などの発言があった。その他の発言例は(2)①②で示したことと同じなので、省略する。

② 色の名前

「色で普段見ている以外の色を見て、さまざまな色の

名前を知り、色に興味を持って、色々な物を見て、色の名前を友達同士で言いあっていた」「あかね色とかみかん色など、普段使わない色の名前を、自然物を見て言いあっていた」という発言があった。さまざまな自然物を見て、色に気づき、色の名前を知り、その後、自然物を見て知った色を使って表現していることが分かった。

6. 質問6「自然体験が子どもの感性にどのように影響を与えるか」

保育者の回答では、全員影響があると考えていた。具体的には、「自然から刺激を受けて色々なことに興味を持つ」「森では園より自然を2倍ぐらい感じる事が出来る」「自然の中にいると、イメージも広がる」「自然体験を通して、五感が敏感になってきたと思う」「五感を使って感じる力が身につくように感じる」「音を聞く力や、見る力、匂いの変化に気づけるような身体全身で感じる事が出来るようになっていく」「自然にふれあうことで、新しいもの・初めてのものに動かされてワクワク・ドキドキしたりしている感じがする」「地球のエネルギーを自然の中で、地球の中で生きている感じがする。命を感じているように感じる」というような発言があった。子どもと一緒に森に行って、自然体験をしている保育者は子どもたちの様子から気づいたこともあるが、「自らも五感がとぎすまされるような気もする」「自然の中に行くのが楽しく、気持ちがいい」というような、自らの体験も子どもの感性の気づきに影響があるような回答もあった。

7. 質問7「自然体験が子どもの表現にどのように影響があるか」

感性同様、保育者全員、自然体験が子どもの表現に影響があると考えていた。具体的には、「体験して感じたことを、友達や先生に見てと言ったり、言葉で伝えたり、指や身体で形を表現するようになる」「自然の中で自分の興味あるものを見ることによって、イメージ力を膨らまし、リアルに表現しようとする子どももいる」「普段より感じる事が深まり、言葉で伝えるにしても伝える語彙が増えて、語彙力が高まる」「絵で表現しようとしても、こまかいところまで表現しようとするようになる」「伝え合う力が高まる」「自然の中で遊ぶ力、遊びのレパートリーが増えている」「自然で感じて驚いたことや不思議だな、すごいなという気持ちを誰かにつたえたいという気持ちが高まる」「伝えて、共有してもらおうというやりとりから、自分の気持ちを伝える力が育つと考える」「自分が面白いと思える自然の現象を直ぐに伝えたいと思えるようになる。そして自分が思ったま

まの言葉や絵を描けるようになったと思う」「落ち葉を並べて動物に見立て、自然の中で自由に表現する力や自由表現の広がりを感じる」「表情が豊かになる」「感じたことを色々な表現方法で伝え合える」「興味あることを、いつもとは違うような身体表現というか、身体からふきだしているような感じがするぐらい、意欲にあふれているように感じる」という回答があった。

Ⅳ. 考察

今回の調査では、ふれあいの森に引率経験のある保育者に、ふれあいの森で子どもの「音」「形」「匂い」「感触」「それ以外」の感性や表現に関するインタビューを行った。その分析結果より、ふれあいの森の自然体験の中で様々なものやことを感じたり、気づいたりする感性

表7 ふれあいの森での子どもたちの気づきと、感性と表現の例

質問項目	子どもたちの気づきの対象	子どもたちの感性と表現の例
質問1 「音」	鳥や虫の鳴き声 風で木が揺れる音 葉っぱや落ち葉のなる音 雨の音	季節によって鳥や虫の鳴き声が違う 葉っぱがカサカサ言っている 風の強い日は木が揺れる音をゴーゴーとなっている 木の枝を折るとポキッと音がするけど、太めの枝はいい音がしない。何かしなっという音がする 森を歩くだけで、音が鳴ることに気づき、音を言葉で表現する 落ち葉を踏むことによって音がなる 雨の日にカッパを着て歩くと、雨の当たる音がポツポツという音が鳴る
質問2 「形」	葉っぱやドングリの形 虫の大きさ 葉っぱやドングリの穴 雲の形 その他	大きな葉っぱを見つけて自分の手と比較する 今まで見たことのないような形の葉っぱを見つける ドングリの大きさを比較して、これはこんな形、小さい、細長いということを友達と話す 虫の大きさの違いに驚いている 葉っぱを見てお面だと顔に合わせて友達や先生に見せる 雲が走っているとか言いながら、雲の形や変化を楽しんでいる 色々な形をしている石を見つけて、2つ合わせて動物に見えるね
質問3 「匂い」	空気の冷たさ 葉っぱ 動物のウンチ 森全体、雨の時の森	冬の冷たい空気を冷たい匂いがする 空気がヒヤッとする匂いを感じる 葉っぱで甘くていい匂いがする物を見つける 甘いにおいする葉っぱを匂って、蜂蜜みたいな匂い お茶作りの工程で、いい匂いになってきた 葉っぱをにおって、ハーブではないけどハーブの匂いがする 動物のウンチの匂いを嗅いで色々感じていた 動物のウンチの匂いが土の匂いがする 森全体の匂いを季節によっての違いや、場所によっての違いを感じている
質問4 「感触」	落ち葉を踏んだときの感触 葉っぱを触ったときの感触 土を踏んだ時の感触 樹液の感触 その他	土の感触を足で踏んで、足の裏から感じている フワフワしていると感じたという 葉っぱを触ってつるつるやざらざら、ベタベタとかふわふわに気づく 厚みや固さに気づく、毛が生えていることに気づく もちつつじの葉っぱはベタベタすることに気づく 冬の雨の寒い日、足の指が痛いと感じている 昆虫ゼリーはベタベタしていないのに、樹液はベタベタする 雨がカッパにあたる感触を感じて、音と雨粒の感じを楽しみながら歩く
質問5 多様な視点（上記以外）	色 季節の変化 冬の虫 イメージとの違い	季節により森の色が変わっている 森の中で色々な色に気づいていた 季節によって、ドングリの色が違う カマキリが季節によって色や大きさ、見つけられる数が違う 季節によって森の木の様子が違うことや葉っぱの数が違う 夏はすっごい緑だけど、冬になるとはだかん坊 虫が冬にいない 川の色が自分のイメージと違ったことに不思議さを感じる ドングリをこすって輝きを感じてきれい 普段見なれている以外の色を見て、さまざまな色の名前を知り、色に興味を持っている あかね色とかみかん色など、普段使わない色の名前を、自然物を見て言いあっている

が育まれていることが見いだされた。また、それを言葉での表現だけでなく身振りや手ぶりなどでも表現していることが見いだされた。そこで、表7に「ふれあいの森での子どもたちの気づきと、感性と表現の例」について整理を行った。

表7「気づきの対象」欄を見ると、森の中で「葉っぱや落ち葉、木」だけでも、音や形や匂いや感触を感じたり、気づいたりしていることがわかる。さらに生き物（鳥や虫や動物）についても鳴き声、大きさなどの形、ウンチの匂いを感じたり、気づいたりしている。季節や気候に関連して、季節の変化や色合いの変化、空気の冷たさ、雨の音、冬の虫などにも感じたり、気づいたりしている。

さらに、表7「感性と表現の例」欄は、子ども達が気づいたことから生まれる感性や表現についての具体例である。実際の行動として「見る、聞く、触る・触れる、嗅ぐ」ことによって感じたり気づいたりしながら感覚の働きを豊かにしていただくだけでなく、年長児だからこそ、子ども達は言葉で表現したり、伝え合ったりしながら、自分が感じたこと・気づいたことやイメージを表出している。感性においては、それぞれの項目について、気づきや、違い、同じであることに気づき、感じるがあった。そして、表現においては、気づいたり、感じたことを、言葉で表現したり、身体で表現することが多かった。また、1人で表現するだけでなく、友達や保育者に共有しつつ表現をしていたことが分かった。

このことは領域「表現」（内容の取扱い）の「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」がまさに満たされる経験をしていることがわかる。また、『保育所保育指針解説』の該当箇所の解説を見ると、「豊かな感性は、幼児が身近な環境と十分にに関わり、そこで心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられるようなものに出会って、感動を得る」ことから始まることや、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など、自然の中にある音、形、色などに気付き、それにじっと聞き入ったり、しばらく眺めたりすることがある。そのとき、子どもはその対象に心を動かされていたり、様々にイメージを広げたりしていることが多い」と示されている。

A園の年長児たちはふれあいの森に毎月出かけていく中で、その森の中で出会う様々な自然や自然の事象に心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられる機会となっているのであろう。また、それらに心を動かされ、様々にイメージを広げているのだと考えられる。そのことが表7の「感性と表現の例」欄のように現れていると言えるであろう。また、質問6.7の回答からも、自然の中

で、気づいたことや感じたことを誰かに伝えたいという気持ちが高まる。と発言があったので、自然体験は子どもの感性や表現に影響があるということが分かった。

A園は、自然豊かな園庭で、常に自然にふれあうことが出来る園ではある。子どもたちは、園内でさまざまな自然体験を行っているが、ふれあいの森では自然のより豊かで、自然の種類も園庭とは違い、自然の規模も違うので、子どもに与える影響も違うように考えるようである。

また、自然の中で五感が刺激され、感じる力が身につくことによって、子どもの感性が豊かになり、感性が豊かになることで、気づいたことや感じたことを、伝えたいという気持ちが高まり、伝える語彙が増える。また表情も豊かになり、見たものをリアルに表現しようとし、身体表現も豊かになるように、表現を意欲的になるように感じるぐらい、表現にも影響があると考えられる。

V. まとめと今後の課題

考察で述べた通り自然に触れる保育を豊かにしているA園でのインタビュー調査において、下記のように自然に触れる体験が子どもの感性や表現に影響があることが分かった。

- ・自然の中で五感が刺激され、感覚の働きが豊かになる。
- ・五感が刺激され、感じる力が身につく。
- ・子どもの感性が豊かになる。
- ・気づいたことなどを伝えたいという気持ちが高まる。
- ・表情が豊かになり、表現することに意欲的になる。

以上のことから、今回の研究テーマである、自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性、そして表現への影響があることが明確になり、保育の中での自然体験、自然との関わりの大切さが明確になった。

しかし、A園の保育者のように保育の中での自然体験、自然との関わりは大切と思っても、街の中で自然が周りにあまりないことで、自然体験が出来ない園もある。また、自然体験をすることで、子どもが怪我をすることを危惧し、あまり外遊びや自然の中での園外保育を行わない園もあると聞く。環境やリスクなどの要因だけでなく、保育者自身が自然体験をしたことがない人もあり、どのように自然体験や自然との関わりのある保育をすればいいかわからない保育者もいる。筆者が、他園で野外活動の立ち上げを行った際、保育者自身が自然体験をしたことがないため、見通しのつかない保育に戸惑いを感じた保育者もいた。しかし、保育者自身への自然

体験の研修を行った後は、保育者自身の感覚や感性も豊かになり、自然の中での表情や表現が園内の様子より豊かになっているように見受けられ、自然体験を肯定的に捉えられるようになったことがある。そのことを考えると、子どもの自然体験や自然との関わりを保育に取り入れていくためには、まずは保育者の自然体験が必要になるのかもしれない。保育者が、自然体験を楽しむようになり、保育の中で、自然体験や自然との関わりを取り入れていく重要性を感じることから、始めなければならないのかもしれないと考える。

今後の課題としては、1園だけではなく、より多くの園・保育者へ、自然に触れる保育の中で育まれる感覚や感性、そして表現への影響に関して、また保育の中でのどのような自然体験、自然との関わりを行っているかに関しての調査をすることが必要と考える。

文献

- 1) 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針.
- 2) 前田綾子 (2020). 子どもと自然との関わりについての一考察 - 保育所保育指針に照らし合わせて -. 人間教育, 1, 27-31.

謝辞

本論文作成にあたり、大変多くの方々にご支援、ご協力賜りました。

お忙しい中、調査にご協力していただいた認定こども園A園の諸先生方には、厚く御礼申し上げます。

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。